



竹世説美少年録

四

特
透 13
1279
14



1279
14

近世説美少年録第三輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第二十五面 仙術を示して舌命哄騙を
丹州と成す福富指を添

復説福富大次次。金剛禪舌命道人。その側室小槌等と伴も。陣の路
次も。宿所近く。一日。一個の伴當と走ると。件の陣の趣を。阿鍵の
告たり。且。阿鍵の奴婢。們的。分付て。形の。ど。準備。今。今。と。俟。程。その
日。哺。時の。比。及。の。大。夫。次。の。舌。命。と。傳。て。宿。所。の。あ。ら。着。た。け。ら。今。朝。も。迎。の。為。に
と。途。を。出。る。里。人。と。奴。婢。們。の。奔。走。混。雜。と。い。ふ。も。あ。り。と。大。夫。次。を。見。目。の
被。け。ぬ。が。う。舌。命。と。傳。ひ。立。て。小。槌。の。復。興。の。乘。り。た。る。傍。小。庭。口。より。早。急。さ。さ。と
打出。下。見。も。共。侶。も。離。舎。案。内。せ。る。主。人。態。等。困。る。及。賓。客。皆。後。も。阿

美少年録第二輯卷四

鍵心を用ひ。給使の小厮養娘。茶を看め。又果子を薦め。如芳は風爐に
浴れ。夕餼酒内。れ彼と管待。丁寧なれば。客の主人も。あはれ。不長途の疲勞を
茶のね。舌命。八層。これを解ひて。毎枕。成就。ける。信而。その夜。大丈次。阿健。舌命が
縁由。箇様々。と。其示。と。那人。清浄。と。首。千。の。験者。ふ。其。婦女子。の。憚り。あり。
此。の。飲。翌。より。と。逗留。中。日。毎。の。應對。の。俺。做。下。媳婦。の。萬。支。の。機。を。屬。て。管待。を
虧。ひ。て。那人。の。元。俺。家の。活。大。黒。で。其。考。か。と。ふ。阿健。の。あ。ろ。ろ。舌命。も。小。楳。門。も。
一番。の。對。面。を。給。使。も。天。國。を。三。十三。三。の。娘。と。小。厮。の。侍。り。と。い。く。疎。累。多。り。
然。程。の。大。丈。次。の。次。の。朝。も。面。多。時。多。離。合。の。赴。は。と。舌命。と。訪。尉。の。語。交。
煉。金。の。修。法。を。請。ち。已。ぎ。り。と。舌命。の。然。と。と。領。地。の。其。の。催。促。せ。れ。と。も。人。負。
道。既。の。用意。の。且。八卦。爐。を。造。る。べ。因。て。方位。を。考。へ。小。道。里。より。五。六。十。歩。あり。
土。庫。の。を。幸。ひ。し。乾。金。押。土。相。對。と。土。生。金。の。其。稱。は。是。究。其。の。外。且。這。里。に。

その面屋より。天井を隔る廊下。續は遠く。毎の往還。便り。よ。けれ。酒
那里を用ふ。快々準備。の。とい。れて。大。丈。次。怡。悦。不。堪。を。猛。可。泥。面。と。言。は。せ。
塗。土。の。云。云。と。告。示。一。あ。ろ。ろ。と。七。僮。僕。們。の。土。と。採。り。庫。の。東。西。の。送。り。を。
出。て。他。所。に。移。さ。う。總。て。舌命。の。指。揮。に。任。し。庫。内。の。爐。を。造。る。形。状。を。八角。の。や。
各。寸。尺。の。八。角。の。是。八卦。を。表。し。皆。の。法。は。後。の。終。日。と。作。り。果。け。り。火。を
て。乾。け。れ。ば。用。ふ。足。り。と。の。茶。種。の。舌命。が。推。考。する。貯。藏。の。め。が。と。只。求。て。求
る。の。と。の。餘。の。東。西。の。買。ふ。も。及。び。舌命。の。信。速。の。爐。を。造。り。れ。と。勞。ふ。て。其。其。道
吉。目。の。今。宵。母。金。を。丹。辨。の。斂。て。翌。日。の。法。を。約。す。と。の。大。丈。次。の。あ。ろ。ろ。所。藏。の。圓
金。千。兩。を。竊。ふ。も。つ。り。取。出。と。を。依。舌命。を。遮。り。と。舌命。の。言。も。指。揮。と。黃
銅。の。と。造。り。る。火。函。釀。鍋。碗。碟。も。あ。る。限。り。取。出。と。七。伴。の。金。と。其。俱。の。玉。茶
茶。種。と。相。加。え。目。最。大。の。丹。辨。の。斂。め。泥。を。厚。く。封。じ。火。口。を。力。を。閉。り。け。り。緯

果て舌命がのち母金の三官券の千両を修法より十倍の利に
 各。かれも三官金の一朝の煉取りを死のあつた八六十四日と初
 その間老実ある小厮二名を隷置して昼三番夜三番由勤り炭を
 更中火を絶たざるを炭を継ぐ折中貧道直く指揮せし件は外
 邊の近づくを許さず倘不浄のの立入ると丹井の壊すの事
 銷散して胸を噛むの後悔あるの義よく歳びへ。貧道の翠より一晝夜
 修法あり。炭の多るを継ぐべし第二日の朝より七件の小厮を
 所作も。公羽の折るを等用ゆる事あり。于寧に説示其大
 服と。這夜の且土庫と銷と俱に退けの徳而之詰旦舌命の
 正。火と炭と法と修してこそこの餅の向の外の日の暮る
 八卦爐の炭継の凡作と京市を相心ゆえ死役あるも他
 仁八五郎をとりめれと豫て心小擇
 年十六と十五の兩個の小厮に分付。第二の朝より件の爐邊に隷置す。大
 夫次の舌命と共に折々其頭を看輪る。その樂しきと云ふ由わが竊の首尾を
 思惟る。この九還丹一甕中。一萬金の所得あり。それを母金未だ又煉らばその
 萬金九二番折かへし百萬金の富入者あるん徳も短る掙す。春時秋
 外敏め冬時て夏熟る田畑の風雨の患ひあり況綿と採り糸と繰りて織出を布る
 との綿は豊作稀小して玉の間の色はその利薄く又牧の駒るど有身より十二不
 月の光陰を過して空をなす一疋あるてい座も出さずその良馬の得るが本錢寡
 利の多るは這仙術の次良助の遇ひの冥加の餘る天の錫黄金が一期の
 子孫々を相傳へ。その富諸侯の敵と。吁愛たやと壯麗の目を見たる大徳
 無慾は近守銭箱のあり祝ひ他事も。日毎の舌命を管法に東の貴賤を

あて老実あるぬのの術あり。仁八五郎をとりめれと豫て心小擇
 年十六と十五の兩個の小厮に分付。第二の朝より件の爐邊に隷置す。大
 夫次の舌命と共に折々其頭を看輪る。その樂しきと云ふ由わが竊の首尾を
 思惟る。この九還丹一甕中。一萬金の所得あり。それを母金未だ又煉らばその
 萬金九二番折かへし百萬金の富入者あるん徳も短る掙す。春時秋
 外敏め冬時て夏熟る田畑の風雨の患ひあり況綿と採り糸と繰りて織出を布る
 との綿は豊作稀小して玉の間の色はその利薄く又牧の駒るど有身より十二不
 月の光陰を過して空をなす一疋あるてい座も出さずその良馬の得るが本錢寡
 利の多るは這仙術の次良助の遇ひの冥加の餘る天の錫黄金が一期の
 子孫々を相傳へ。その富諸侯の敵と。吁愛たやと壯麗の目を見たる大徳
 無慾は近守銭箱のあり祝ひ他事も。日毎の舌命を管法に東の貴賤を

美少年金三車巻

此も厭つ。その身も共酒うち喫く世の雑談小日と清は事情と知れぬ。疑訝らざるも。那爐の不老不死の仙丹と煙るあやうん不口は。

不欲多の壽命をとり笑ひて心のまきひけり。左右程は八九日と経たりける。有一日又大夫次の離舎を赴けり。舌俞小槌の蓋と薦也。只顧数待折。舌俞が北白川宿所より一個の山而人の索来て却舌俞小報る。

母君の風の心地とて臥し。母君の衰へて最も危く見えぬ。

是等のよしと告まうさん。と枕摩の湯屋へ赴けり。那里より。

老爺誘引れ。俱に立坐のいと。那客店中。

舌俞のち敷馬。そを安う。母刀自の健。持病と。

旅宿を思ひ。由の六敵齡六十のあまれる親の邪熱小疲勞を増した。

然るを危窮するべし。何れにせん。當惑の眉根を頻り手と。

外る。僅小。手と鮮に大夫次。對して目今。如母の病。

着車。一日の千秋。恨の。速。看。

思へも。賤妾を推。路の程。思。任。遲滯。及。當。

年来。病。座。霜。露。の。輕。症。程。る。瘥。り。の。然。も。

母君。復。尊。師。光。臨。有。老。拙。預。の。其。甚。麻。公。他。事。

今。深。念。及。左。右。交。遊。の。失。意。不。甘。賤。妾。不。且。

許。の。脚。尼。會。九。還。丹。の。修。法。六。十。餘。日。の。限。り。

後。母。の。病。着。瘥。り。萬。一。の。再。來。也。

不浄の做ぬらん身咱們の做代りて折々あるを屬の炭の加減の小榎も知れぬ。あ
 りがたのあふ他お同ふても辯まべ。御高も既のひるふて。不浄の故言の疎かしく八卦
 爐を汚穢ま行心あふ法術遂に成就せで本を喪ふ後悔あらん。あの義を忘るれば
 と辞せりて説諭して小榎を見かろ。召近づけて阿孺もやうな趣るれば又初らうのふ
 も及ぶ俺が立とうあつる日まで那爐のふ心を用ひて虚々と言を送るが月
 障り十日の間篋居て不浄を避よ等雨かしく行心あふ俺決して阿孺を許さま
 佐との罪を糾き下。打出丁見の這意とて側杖受ると自暴身を示は言葉の露の
 間も去向といそ草枕行装も疎忽々々不告別し要用の行篋を尚人小駝と
 風一葉の散る如く飄然とて出まゆ。林止め難言大夫次の先立立々庭門表
 小榎も兩個の了髪と共別成を鳥の居越の浮宿不樂は不來人目と契は
 妹と使の縁頬ふして目送りのけ。却説福富大夫次の舌命がととるるり。内

外の批評の影護さ離舎を交加して酒燕るどい若れども三々々の餅の珍味を
 擇る。肩聊も疎略をせ。或は乾菓子煎茶の類名酒名物それ彼と。京師の
 便の詭説てとて買まさせ。數多の貯措て日と母ふらう。小榎の薦めて正首小
 管待。たる。有日又小榎のいさう。師のかつて束まさせ。ま候不樂。ととるるめ
 も。お見目あ被らと鬼妻ふいと娘婦のあり孫女兒も。都のまゆを知り。も
 る。田舎見でひ。這徒然と慰る。辞敵のゆるみ。切て他物を陪堂木も。ととるる
 豫より。師小緊しく教諭せられて炭繼の小断る。ものは。爐邊のゆ。這頭へ
 立入る。とを允され。左の中も右の中も。心つら。あふ。仰られ。と親心。い
 小榎の笑は。不寔ま不思議の縁。と物の役の中も。立ぬ。の。送されて。使ま。ま
 御用會ふ。り。と心苦。の。宿の。ふ。れ。打出丁見が。側。は。徒然。さ。り。と。あ。ら。う。の。こ。も
 離舎の。と。あ。れ。夜。分。の。殊。ら。寂。して。目。睡。難。る。曉。毎。は。結。ひ。果。夢。を。う。り。



福富の宿小
舎前北白河の
立目つとて

大夫次

小25

出像第二十五

美八公一全三冊六

美八公一全三冊六

美八公一全三冊六

有敷茶小物のあつちを猜一とひるけてる目小流去秋の波も春の心のそと動く光
 樹も花の空名草散まきとて大夫次の辱さと恥ふらば宵の三連のふちち騒れぬ
 ちうてく小推鎮めそそその該の可か。余らぬ今宵より。咱們爐邊茶寝まふ。信
 こ。里より那里遠くもあぬ。主人が宿直立たふ心づくとせられ。優れ睡りぬん。這
 義小任のあひねとを小槌の推禁めて。うて然るをせせん。その義の允させあひよと
 辞ふを聴くま。真実立ち。ちうて自ら退る。大夫次の且くと炭继の小断仁八三五
 郎の筑紫琴と三弦も。とて離合小遣して。小槌小遣りて。あん徒然小遣
 べけれ。折々あまを標持とみづう慰めるか。黄金よ讀せ。策子もあれとまくと
 女子の教訓状を肩の張る。東西南北。且されのまを。と心屬れ口状成小
 槌の響る。琴三弦を打出。見小受と。宜くまう。あひてよ。と。咄合小断を返
 けり。任而仁八三五郎の小槌の返辞を箇様々と。大夫次小報。大夫次然を

と領して。名退んと。たりけ。兩個の小断と呼ぶ。免をれ候ね。あり。若們的ぬ。比
 より。炭继の役小宛られ。暇あふ。似れども。夜毎は二度起きると。走行の自由な
 らね。倒小窮屈る。道人附添居れる。別小子細も。えん。若們的知る。那
 人且。這首小在。ね。爐邊の進退心配。り。倘毫む。も。行。年。歳。申。斐。申
 る。は。俺。が。面。と。道人。は。虧。くの。ま。と。人。の。ぬ。あ。ぬ。失。脚。あ。え。ん。徳。れ。は。俺。と。今。宵。より。土
 庫の内。小起臥。て。炭。も。手。づ。う。ら。繼。ぐ。べ。ん。書。直。と。い。ふ。と。も。若。們。の。ち。任。せ。ん。由。ゆ。似
 たり。大抵。は。これ。心。を。屬。く。用。支。わ。ん。召。ふ。死。ま。若。們。の。且。退。り。て。母。屋。掃。せ。よ。か。こ。い
 きて。勢。が。兩個。の小断。の。一。誡。小。及。び。心。を。ん。を。ち。辱。せ。ん。計。ひ。あ。る。ゆ。く。は。る。日。毎。小
 炭。を。繼。ぐ。折。り。必。召。せ。ぬ。か。時。刻。ある。身。を。淨。う。て。あ。ん。指。揮。せ。て。受。べ。れ。肝
 愛。と。と。自。祝。して。狙。公。の。檐。小。敷。れ。狙。猴。の。山。小。帰。る。か。如。く。ち。連。立。て。母。屋。を
 僮僕。隔。室。を。罷。り。け。小。後。又。大夫。次。の。件。の。緯。の。趣。を。阿。健。め。説。示。し。て。是。より

夜毎お只ひと。那土庫うち臥て。爐の炭さ折々ふる。継ぐの豫よりある。計校あれ。然程小槌。大夫次が遺り。筑紫琴も三絃も素より愛の東西。あれは。做ま。夏。手遊。お回。時。標。持。せ。書。貫。の。憚。り。る。あ。ね。密。奏。あ。て。此。の。歌。の。ま。日。の。暮。れ。つ。甲。夜。過。て。も。殊。に。調。と。高。う。と。声。最。妙。の。歌。小。我。穿。け。京。師。の。流。行。の。艶。曲。母。屋。の。程。遠。れ。れ。洩。て。驅。と。の。愛。ね。も。大。夫。次。が。臥。笛。早。へ。側。の。あ。て。奏。る。と。枕。の。暢。小。妙。音。佳。曲。心。浮。れ。宿。の。寝。られ。拙。技。飲。高。手。飲。知。る。よ。る。愛。も。耳。の。黄。金。が。師。あり。阿。夏。の。方。か。ぐ。も。か。不。え。左。さ。ま。右。さ。る。思。も。以。難。る。無。分。別。男。子。と。生。れ。甲。斐。あり。て。那。風。流。婦。と。一。宵。の。夢。を。結。ぶ。老。後。の。想。得。の。い。せ。ま。と。肚。の。向。腹。の。答。と。胆。向。心。の。感。ひ。の。御。垣。成。は。衛。士。の。焼。火。の。あ。ね。も。夜。を。燃。れ。身。内。の。温。熱。と。さ。さ。る。け。り。奴。も。這。大。夫。次。の。性。化。負。値。の。賢。く。酒。の。乱。れ。色。の。耽。ら。浮。は。方。の。苟。且。も。誘。り。と。る。り。一。夕。暮。れ。阿。

夏と四五稔宿所小留置これ。此も心と動志最正首小のせり六十のう三城幾つ。歳と過して孫の黄金が年もを。二八のり。今ゆる小槌の色小惑ひ。始終の氣質融ら。狂人の沙汰に似れ。見識卑は俗骨人の佳も亦る。あ。あ。却。又。阿。夏。の。方。か。ぐ。も。か。不。え。左。さ。ま。右。さ。る。思。も。以。難。る。無。分。別。男。子。と。生。れ。甲。斐。あり。て。那。風。流。婦。と。一。宵。の。夢。を。結。ぶ。老。後。の。想。得。の。い。せ。ま。と。肚。の。向。腹。の。答。と。胆。向。心。の。感。ひ。の。御。垣。成。は。衛。士。の。焼。火。の。あ。ね。も。夜。を。燃。れ。身。内。の。温。熱。と。さ。さ。る。け。り。奴。も。這。大。夫。次。の。性。化。負。値。の。賢。く。酒。の。乱。れ。色。の。耽。ら。浮。は。方。の。苟。且。も。誘。り。と。る。り。一。夕。暮。れ。阿。

三金三車

三金三車

利益のあらで己をたもと相撲ふごとく引立て理を臥簾へ伴ひけり。任而小槌の
 曉方不起別れとつとて大夫次も共宿の身と起伏拜して既而自覺の想ひを
 魚水の契りを結びて君の為のいふももる餘命を惜む心の花の香を留め
 老樹とて嫌れぬ夜毎々々のかみ路を猶りつても祈りのもと小槌の安んむ
 そら宣ひたるまのゆき濡ぬ先を露をも厭引く曳れぬ小車に重んず情を無せ
 られ玉の祟も這身の科も必るまふの欲一死男女の色情の老曾の森若松の
 立添ふ例も世もまら願ふ今の御心の垂るるのさへ獨宿もせし寝せもせし
 然るも妾が側中打出丁見が臥すを他們が熟睡と後の暗跡を忘れぬと
 契る母の虚情虚衷の羨ぬ大夫次の廊下續泥の後朝も別とらうの草の床離れ
 心も放ちて離合へ還しけ。是下りの後大夫次の小槌と密會ふとの身の樂に
 志すうら内外の人の誹謗とありき活業の比皆老僕に任く。丹爐のさきも用ひ

是の折々小只炭と継ぐの願ひのまも舌命がわらふ東をわれとゆふなり小槌の
 色も濡れて痴情の堪むるもの凡盤纏の為ふと竊の金を贈りて小槌の推辭
 するも觸れぬ縁も知るもの如く良人の昔自自由ゆれぬ妾も東西の医にた
 只何時もぬらうの要せぬぬのるるにそれ小優るる快ひあふぬ。あさき收めぬひと
 いふ大夫次推返して焦るるの死身の実情のと辱せとまれぬまなれがとて邪魔の
 るぬのて浮世の銭帛の髪の上の飾衣裳まど贈らぬ外の視ふ事。那道人の
 疑る媒介あるる東西もぬらうも進らぬ切て是でも受らぬ何ぞは俺の
 誠と表はりあふぬ。枉て寸志不後ひぬと賄話が如く推薦ぬ。或る五兩或る三
 両裏中も費せと西三番の及びの左右も程ある舌命が北白川へかろし。四
 五十日も麻糸の九還丹の煉法も満足の日近づた。登時大夫次の思ふ。仙傳
 無上九還丹を八六十四日也。初て成就せと笑ふ。その日子も既ぬる。十四日程も

ろのふち。俺身小槌と土庫の夜毎此の情由ありとも。爐の頭へ屏風建
 不浄を避けるまれば丹陽の障りあり。を那道人のつらまをその目まで
 爐を披く一萬金の大利を獲つ下。又どうも造化耳く道人暴病病弱
 小槌と側室をせむと十二分の造化の萬事。幸ひある折るれば是れのみ
 造化のまじり。謝礼の金も分る及ぶ。徳
 白峯に起ると浮ぶ雲の富貴自在樂。此類するけり。徳多し。三四日経て
 舌俞の兩個の徒者と俱と白川よりかへ来りければ大丈次いあふ。と
 然氣を離れ去りて。舌俞の對面と是の老母の安否を問ふ。舌俞の
 心嗟歎してはれは俺が母親の鍼灸茶餌の效も。身も。目も。比出人の
 這里へ到着せし。これ彼同日よりければ末期のより。送憾ま今も亦

のふち。道中をへかくあるべと。知らざりければ夜を日不継て宿所
 る。衣傷悲泣は堪ざり。を却ある。安葬の。過七々の追薦讀經
 日を送りては。送所へ疎濶あり。る。修法成熟の日子も既近。つ
 四十九日と過とを。依後禊と。又首途と。風不起。晚く宿と。一日片時
 飛が似来つる。今日則吉日。快々丹爐を披く。と。大丈次一談
 且その不幸は悼んで。母の真愛。追慕の袖も乾か。を。這方の
 御ある。小槌られて。時且違へ来ませ。大なる。御深切実感
 佩は。八卦爐の。貴教の如く。今も由。折々小炭を。心安く思召れ
 上俺の。小槌刀。了。髪違も。俟不樂。徒然の。一
 復と。徳。迭。對面。那骨。水母。筋力。屬。は。嬉しく
 且け。小槌も。膝を。找。比。稍。久。御厄。會。安。為。

いささかささめと命釋とされし古命の然るを領せり。量尺の比ひも多火急の婦
村色とをぬき送り措けず賤妾們と口をうんと云ひいかも喪中不あれがふ不任
世是きけお及び一とふくも意外の趣舎多内寛か謝しき人誘共侶不那聖ま
貴て丹爐と被て修法の財宝とておんを快くとも大夫次勞ふて長途の疲勞を猜
まれば自限われ貴意に任せんか。這方東をせとて土庫人伴ふ心小権をゆ
るり打出丁兒も修法の奇特とてまきく一と。迹不跟れ共侶丹爐の頭へ赴けり。

第二十八回

慈不耽て大夫次家を亡せ

却説舌命道人の大夫次と共侶土庫を赴き丹爐の頭へ坐せ占て且その炭の燃さ
はと爐内の容子と得とてうち驚驚とて天を怖言ゆり立て噴を斬八卦爐の
丹測は太く壞れらうと云ふ大夫次も亦駭れてその宣言を聞き教のどく炭を絶さ日夜

由ぬいささめと命釋とされし古命の然るを領せり。量尺の比ひも多火急の婦
村色とをぬき送り措けず賤妾們と口をうんと云ひいかも喪中不あれがふ不任
世是きけお及び一とふくも意外の趣舎多内寛か謝しき人誘共侶不那聖ま
貴て丹爐と被て修法の財宝とておんを快くとも大夫次勞ふて長途の疲勞を猜
まれば自限われ貴意に任せんか。這方東をせとて土庫人伴ふ心小権をゆ
るり打出丁兒も修法の奇特とてまきく一と。迹不跟れ共侶丹爐の頭へ赴けり。

子 隸れいなる爐ろ頭づをもとして何なんと母屋ははやへ退ひりたる。あらふ忌慢きまんのあらははを丹爐にわろへ不ふ

 淨じやう犯ぱんされて俺おれが法術ほふじゆつの破やぶれる。鷹たかさら報ほうを俺おれが受うけして目めの做しせし悪あくまるあらふ

 人ひと快かいく報ほうようふふと緊きんくく回わいれる。兩個ふたごの小廝せうしの頭づを搔かき目めを注つして共とも侶りよの

 答こたへる。不ふ舌ぜつ俺おれ們らへは比ひよう炭すみ継つの役やくを免まりして母屋ははや拵しらをしては這こ爐ろのや

 女に與あらば夜よの目めもし東あづま人のこころのこころ。継つせしひひあらふは舌ぜつ前まへへ領うちをてしては情じやう

 由ゆを猜そいはちた。這こ疑ぎひひの小こ樵せうのありのとしひひ乞ぎとしてはててははれは御妻おんな俺おれが遠丹爐とんわろを

 破やぶらる。あらふ汝なんぢらん其その甚し麻あふふ奴やつとし這こ里ら宿しゆくて秘方ひかうの丹爐にわろを汚穢けがしたる。快詳かいしやうの招

 道みちせしようのめ目め物ものをせんじと罵ののりし鐵てつ如意にぎを振あらわりし七なな樓ろうとし最も烈れつとし勢せうひひ

 小樵せうせうへ吐嗟たさと駭おそれし逃にげして遺いりし過あまりも過あまりもし樓ろうとし身みを起おこせし大おほ夫おと次つぎ

 慌あわ忙いにして推隔おし推おし禁こめし師しの腹立はらだ理りのしれしもも此この女に中ちゆうの科かのありのはは皆みな老

 拙あつちが衝おつくりし過あまりの科かを屬ぞくしし老拙らうあつちの勸解くんかいと仕つかへし先ま且かつ奴やつと納なめしと

辞ことを畫か推寛おし解かい。仁にん八はち耳みみはは恁おん々々と事情じやうじやうをしめしれし仁にん八はち屢る屢る忘わすれしとし走はりして

 母屋ははやへ赴おもひし。且かつくし一個いっごうの老僕らうぼくが土庫とこの戸かど口くちへはりして大おほ夫おと次つぎをしては身みを

 起おこしし找あらし向むかし。とし束たば金かねを受うけして昔むかしの席せきはは立たちしりし。あらふは件けんの金かねを舌ぜつ前まへ

 贈くわりし却かへりし。あらふ最薄さいはく義ぎのひひも過あまりの料りやうを受うけして小樵せうせうの許ゆるさし

 魚いのこ優うにし。とし賠ばい話わを包つつみし紙かみを解ときし。金かね六む七しち兩りやう二分にぶありし。舌ぜつ前まへ

 少すく金かね亦また復また大おほく性せい起おこりし。あらふ何事なにごとも浅あまり。密みつ夫おとの賦ふ價げと七しち兩りやう二分にぶを俗よこのこ

 とし俺おれがはるの功こう金かねを受うけして小樵せうせうを允ゆるさんと。畢ひ竟きやう咱うらは們らの驚おどろし。這こ寫しやの和わ禪ぜん

 言こと証しやう問もんぬ恁おん々々と一いつ身み立たちし。那御妻なごんな奴やつと擣うちを。招道しやうだうとし奸夫けんぷと俱ともに推併おしあひし

 四段しだんの足あし其首そのくび退ひれしと敦圍とんゐて罵ののりし。狂くるを大おほ夫おと次つぎの又また々々と推鎮おしちんしし。身み外がい面めんを

 老僕らうぼくは恁おん々々と分ぶん付つけては金かねを取とりし。一足いちそく躡しぬ數かずを増ませし。五ご十じゆう兩りやうありしと遞たとせし

 舌ぜつ前まへの美み引ひく氣色けしきをしては罵ののりし。狂くるをしては結むす果くわらし。あらふは大おほ夫おと次つぎのこ

外の者おぼやましこの胸苦きよ銭遍ま件のお僕を毎屋へ返遣て漸々和
 解の金を登て後三百金泊る古命の僅の領に俺の豫も知らず如黄
 白と殖まの自由自在をせんとて銭鈔をえれば餓鬼の世の人と素より異然心
 知れぬ這二裏の金とて面を殴んとせると許容まの縁と苟且ぢぢ
 謬友垣と結び老人の飽まを恥を耀せんもの亦長袖の本意あはれ故
 胸を捺らとぐる随小西安る東西を受けて小槌とぬる大夫妻和老との絶交の
 再生の洪恩を忘れさせと害めるといふ終の似非廣言を咄は喋く騙賊の意胆
 件の金を懐へ楚と納めて快立ちと願て誨相槌の小槌と俱に打出丁見を先立
 ら悠々と離合退れ却兩個の従者は緯恁々と其示せ一個の従者ある
 して走りて外面へ出る豫準備とあらけ多く四個の轎夫小行儀輿二挺吊せ
 と伴かてかろ来れられ舌命の小槌といふを打て丁見の相轎を件の儀輿

乗る程又一個の従者の小槌其頭へ散たる衣も調度も一所小腹で
 多く二裏に荷造りしと分を恥て此彼二名楚と駝ひ身起せ古命の草鞋の
 紐引締めて朱鞋の両方苛めけの巨を振りて庭門より皆共侶の如く吐
 冷笑して造化精妙といへる小虫融を若清水迹の濁せと底深死伎倆
 棄せ一條葉舟の仕方も知るの有り有恁けれども大丈夫の存も惑ひの覚
 る俺が那母金千両を喪ひ小寔所所以あり那更なるの後の随小十倍の利を
 得べり一思念の外とらひ俺が身上の傷と大損とせしをうへ六十餘日
 御食心雑費も少勘のりあはれ膳又二百金を折れを異治をなす這外
 聞を争奈いせん悔いせんとてけりと蹠蹠考藻小虫の恨のり
 秘密を諦くやうもあはれ氣と腐らと人あはれ面を獨納戸の筆管で且
 治も生さけ然程園宅の奴婢們的威這椿夏胆と洗と這首聚合那首

停在主の噂直と銷をのり隠れもあられ阿健よりと傳はて驚愕且呆
まこ心苦多く思ひたり。さるる船と這次の日の當國の守佐々木高頼の陣代あり
け。捉山柴太郎玄繩と呼ぶ武士野兵共餘名を從て呼門由せ福富は宿所
へ直と推寄せ來る前後の門より乱入して御錠を呼子呼杖を閑客房書院
編室庖厨中間僮僕隔浴室雪隠寔木場土庫離舎に至るまで奥より
せ。端ともいせ送る隈多く檢宅する騷動のうもあられ奴婢們は老
僕さ景市凡作甲乙とさ。駭怕れ拍揮々隠れんと度と喪以十日小背を
撻惱えん吐嗟と叫ぶも多りけ。當下福富大夫次へ慌惑ひり納戸より走出
玄繩の身邊近く跪く膝節戦へ慄れる訛声高くぬり絞りと殿達要時等
せ。在下福富大夫次へ何等の御用り知るねも。這身小ちて檢宅せざる罪ありと
もあられ不え人へあられとせも果冷捕多の頭人玄繩結と疾視と黙れ大夫

次科る。これのちちひん
さ。近く找て兼れ近屬菊池武俊が殘黨野倉鍛冶郎有藤と安平の綽
號と鐵屑と喚做り他叛逆の志ありと。竊に修驗者打扮して有驗觀主
舌命道人と偽稱。一個の淫婦と兩個の了髮と相携り京畿五ヶ國を遊
歴して豪農富商を倡惑し專錢帛を貪り軍要金おせす欲と世の
風声おせす他當國あも来るにあらんと守の賢慮あるより豫密そのお下
知と玄繩も亦奉てその物色を探るわら。いぬ比より汝が宿所は那野全の
鐵屑鍛冶郎並は類の賊婦們を留置より知のあり。慥に告訴あるより
俺速ふら向ひ不意お起て件の逆徒と搦捕んと思ふより部と定め相入る檢
宅せの所以るれども逃せし夜隠せし那鐵屑們の影もなきは何方隠
た愉快と直せのふとと辞せり責問れる大夫次はく駭死て初々曉得る騙



さゆう
 左右
 くれな
 久礼畑の夥兵酷
 福富と檢宅と

中
 梶山玄繩大夫次と囚

三才三才二冊四

十六

大正三



出像第卅六

三才三才二冊四

賊の奸計後悔今や恁々と釋くよも死めぬ。のりて已に死とるれがをく
 頭と擡て御説のゆへも在下素より件の舌命と逆賊とを夢中も知るに當
 筑麻へ赴死て且湯治をる折他も亦か下宿りふ日と累心よりち解を
 かへさる這里へ立ち上る返尊一十七八日おろ他が在所と安え。洛北白川より
 出人に到着と。その母の病着の重なるよと報へる宿所へ還らんには小提
 と喚做を嬖妾と両個の了髪と送留で猛可ふ出た見より。五十餘日及び
 た。さのふかきかへるまで。老母の身まうり。りびを疎漏不過せしとて歎
 述告別して三個の女子と推考で遠くゆへ去り。昨未牌の比るに徳れ在
 下ふふと。那徒と落し遣るに隠せしも絶てる。菊地の殘黨るん。知
 よりぬく遭道際の宿せし。さのゆへに賢察あり。這身の大幸。只か慈悲を
 願しれと呷言をく陳ざれ。女繩声を苛立て。那修驗者。逆徒るし。知

らんとすも證據を。そのゆへにけあるべしや加旃疑。たの今俺が展檢をるを
 中。離舎の頭を土庫の内。造り。爐あり。鑄毫のて。塗を音。と突破れたる
 ぞ。さの何等の為を。檻。さの義も。稟せ。ふそ。と。同れ。大夫次。彼。り。と。なる。困
 じ。答難。ゆ。玄繩。ゆ。苛。立。那。爐。の。を。推。隱。志。野。心。の。既。不。顯。れ。兵。們
 這。奴。と。細。めて。鞭。撻。懲。と。招。道。さ。り。と。最。も。烈。い。さ。指。揮。後。不。畏。兵
 們。兼。る。と。心。も。果。さ。る。西。三。石。衝。と。立。走。り。蒐。り。大夫次。先。と。細。め。り。
 背。と。痛。く。撻。惱。せ。大夫次。の。老人。の。苦。痛。の。堪。む。恁。と。那。煉。金。の。鍊。の。趣。鏡。も
 舌。命。を。説。惑。さ。れ。て。一。千。金。を。喪。ひ。一。五。十。と。首。伏。き。玄。繩。を。冷。笑。ひ。非
 如。異。國。の。法。法。り。も。寡。に。金。を。煉。殖。と。十。倍。は。做。さ。り。あ。ん。之。儲。の。術。の。あ。る。と
 ても。私。は。財。宝。を。造。り。赦。さ。れ。た。國。賊。一。文。不。通。の。愚。民。も。然。る。の。の。知。り。さ
 ら。大夫次。十。个。村。の。邑。長。と。あ。る。を。辨。ぬ。ゆ。あ。る。の。亦。胡。論。之。况。野

会の鐵屑を留置するの事。この期及て走り。其の罪同様のべし。
 且獄舎敷系置て。責め問ふ。其の責め。罵詈雑言。理を責らる。
 大夫次。後悔の外。其の時阿健。次の罪。竊聞。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 堪ざり。涙を拭ひ。走り。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 辞と盡し。勸解れ。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 後々。願ひ。稱。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 捕て。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 科の讞。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 若。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 故。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 鎖。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。

長く。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 男子。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 男色。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 男。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。

牽立。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 患。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 連。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 中。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 憂。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 命。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 浴。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 物。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 領。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 果。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。
 身。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。其の罪。後悔。

憑むる。俺身つらく思惟る千金の子市小死るぞと世の人の口順む故事もある
 まい久礼畑の陳所る有司の人情を贈りて竊の因縁赦を乞まうまの大人の為る
 善根功德地獄の製度も金依る利益ありて獄舎の阿責を脱れんとせむ
 此の義と相計ゆてと密出ま相譚て金銭両方渡とせし丸作の數にて宣ふ趣
 理の之恩を受る家翁の窮厄救ふゆはるの骨を折るとも素より願ふ所
 れども。這金中の尚宣券。五十兩もぬらむ振被足らぬゆえとふ阿鍵の異議を
 その意の任一數を増てゆき金と渡とせし丸作れを受とてその曉昏の後門
 より出て久礼畑赴むる便りを求めて大夫次から林示獄中の安否を問ふ他は觀音寺の
 城へ送遣られて這首の首とせむとせし丸作の金も散まて次の夜の紛れ福富の
 宿所へ還りて竊の阿鍵の報を其久礼畑の陳所りて相識者より便りを徵め
 件の金と鐔酒菜卷衣などを買とてその餘の東西も形のど彼へ此へもの

去つ家翁の頼る家翁の那首の獄舎より觀音寺の城内へ送られぬ
 とせむるもその義を聞知ら東西を贈りて還る知らぬゆえとて五十金買せしを
 益とせむるゆえと己とせし彌勒出世の折にわきま家翁を救はれかべゆの觀音
 寺へ赴きて又一の段仕らんれども守の御座を本城のゆられ有司ゆえとせむるゆ
 愚意の推量も百兩ゆえと足ら三百金の費まの便宜ゆきゆきと辞
 巧むるのせが阿鍵の眉をち頼單てせむ又便りゆきゆきと財宝の費はとも救
 取らむゆえの惜むるゆえゆえと御前大人の思ひ惑を一箱のまの大金古
 命の掠奪されぬゆえとせむるゆえと土庫を守り封ひゆきゆきと俺を臂近不然はるの所
 財のりければあつた限り掻集めて現又現ゆきゆきと同州の内も觀音寺を
 遠るに大義を快かたて更なる術ゆきゆきとゆきゆきと領地をその安ん心安んて
 誅へる吉左右をせせむるべ。それゆきゆきと少少ゆきゆきと期を推し己子舎

おそ退りける。恁而又その次の日、阿健の凡作を招ききて、その密の相譚ある一、
 ようと藻塩草撥哀めておのれど、金三車衣の整いども、百両あまのほろり、
 んがこれありて、左も右もとのあか、這一東衣の外あり、あまの盤纏、
 検めて受とあり、あまの通手と凡作の受納めて、亦異議あり、
 俺が親の佐々木家の陪臣でいひ、故ありて身の暇も賜り、
 西親共お世と去り、俺が比るければ、那藩中、
 告らつて得ぬ、
 翁々を救ふ據とあらん、且、
 正首の尉めて却退せ、
 その黄昏、
 番俺が公羽の罪悪の叛逆人を引入れて、
 討兵の向を、

せーあんと疑れる。そのの紛解、
 とものふと免さるべし、その首伏の料、
 夷げらる、
 らが争、
 又只、
 名告、
 及ぶ、
 肩、
 より預、

此作の形
命の形
年を歴
出づる
記す
清官
察す

この折小影と隠して身の安穩と料らば、後悔其首小立り、あつん噫嘻、小之計校む悪心分別を、定りければ、その詰朝宿りを出て、往方であつた、この目福富の宿所、北白川へ赴たる、老僕小忠、二がかり来て、六編、阿健、報る、在下那地、赴て、舌命の宿所を詢ね、小里人、去て、これを知、夜、皆、石工、修験、絶一人、あつた、忽、地望を失ひ、る、彼、此と、涉獵、ゆゑ、終、便宜、と、入、疑、感、尙、洛、東、白、川、橋、の、頭、ら、又、京、師、赴、て、その、投、ま、素、より、あ、舌、命、の、在、処、知、れ、る、下、洛、外、逗、留、日、世、の、風、声、の、野、衣、有、廉、と、喚、做、ま、の、即、菊、地、の、家、臣、舌、命、の、別、人、那、舌、命、が、原、名、即、鐵、屑、鍛、治、郎、の、永、正、六、年、の、春、備、中、大、江、元、弘、主、討、滅、肥、後、州、山、本、郡、飯、田、山、の、賊、の、頭、領、川、角、頭、大、連、盈、益、隊、小、賊、連、盈、益、鉄、死、折、他、

両三箇の等類と共侶、山塞を逃亡、彼此、潜ひて、或、廻、国、の、修、行、者、打、扮、て、宿、家、の、東、西、を、竊、ち、或、野、伏、山、立、旅、客、趕、威、一、年、来、猿、鶴、の、悪、む、又、と、せ、の、近、屬、又、修、験、者、打、扮、て、仙、傳、丹、馬、の、奇、法、と、倡、貪、林、女、怒、の、豪、農、富、商、と、迷、と、の、錢、奪、一、個、の、美、婦、戎、媒、鳥、と、件、の、美、婦、鍛、治、郎、と、深、く、契、干、遊、行、女、鐵、屑、竊、小、件、の、遊、女、奸、計、と、説、示、と、豫、を、あ、ろ、と、却、の、妓、院、の、親、方、金、と、取、せ、遊、女、城、借、て、小、三、板、と、相、推、へ、遊、歴、の、故、那、遊、女、久、く、返、る、も、あ、り、と、妓、院、の、鐵、屑、鍛、治、郎、の、賊、と、知、ら、れ、央、錢、の、身、に、顧、て、饒、と、放、遣、と、の、任、れ、件、の、美、婦、何、地、の、柳、巷、の、遊、女、を、巨、細、知、る、の、程、小、の、風、声、を、京、也、も、鎌、倉、も、追、捕、の、沙、汰、の、戦、世、の、癖、を、攻、戦、軍、旅、追、て、今、及、ふ、と、空、を、舌、命、の、鐵、屑

鍛冶郎の出没不測の事段ありき。世の人遂に夢破れて菊池の残黨多し。其の言の實なるは南朝の武臣達一箇も忠義ありぬ。其の故は残黨餘類の飢渴の迫りと死に至るまで緑林白波の侍と做て悪名を世に送せし者亦一人とてある。此の遺言を推量するに那鐵屑鍛冶郎の奸賊へ他豈菊池の残黨あるらん。初他が頭領と仰せらる。川角頼太連盈も亦是肥後州の當時那連盈の武俊の従ひて後逃去りしもの。此彼竟に相混ぶ。菊池の當黨と云ふやあつらん。後また証言とて宿の主人ある人のうち譚ひて紙戸隔れ在下空の曾の内小件の遊女出処を知らず。那鐵屑の古命が往方を索る據あべ。と思ひかとも風を追ひ影を捕る街談轡説の拘つらひて日と夜も亦益々一と深念して立ちかたててそのあれたる阿健の驚かすに然るを了らば残賊と友垣結ひて荒麻の湯より這里へ伴ひぬ。薄情や日屬の萬のうへ用心深くもの。

大人の氣質に似けり。寛屈の縲綑を釋くよも。この家の滅却の時節歎と口説きたるら歎と小忠も理りと思ひ共耐難て嘆息の外多し。當下阿健の凡作を觀音寺へ遣はる事情は儘々小忠不其に昔千條の細い影も這一條の果敢るも不憑に心地を去。快かす末に吉左右をせよめと指し折る。專凡作を俟程の二百あるを経ければもその信もるる。なすの疑心起りて二十の足らぬ後生の許すの念を懐かして口獨行の旅を山家おとみ跟られ。敷をれにせむけすも。胸の安き又一層の苦を増し。悔くは小忠を迎ふ遣ふと欲せし者。有一日久礼畑の陳所より捉申玄繩の下行状到來し。阿健並に福富の家を死僕們と里の故老を召よめて玄繩則下知する。大夫次の罪ありて御高木林獄せられ。倉の内にて身まのり。他の菊池武俊が殘黨とせえ。鐵屑鍛冶郎野食有

測の所初と做きそのやあらうとと信計いと考えら然に左界に巨商浮宝屋は荷
 太の船積氏を阿健が叔父へ黄金を為る徒母大叔父るれが這寄あり荷
 三太の教書にさう阿健が書簡とてとと黄金を受とて景市も解と者た
 は鍋類類をのめれととを他は留置て里人をも返けり却又阿健の大夫
 次の亡骸とせん為小忠次小盤纏を取らと観音寺へ遣けれ小忠二も
 夜首小續々走り那里へ赴り綱と主の亡骸と乞求め煙とて白骨を
 壺の斂めを推乃てめり束ふけれ阿健の胸且寒りととあり路傍の涙の間小
 件の壺を受とて一夕家廟小容措々香華と日向看経と通宵成り次の
 日小香華院へ安葬と密々小追薦の法読経形のごとく丁寧の執りて
 日と経る墓表の石と建けり這時も小忠二信絶々となり阿健の心
 小忠二もよく横死と決めて大夫次が過七々々の好事を執行せし毎亦小

作が苦提さへ吊ふも涙の袖の雨零ぬ歎き目を強る阿健の良人大夫五がを
 いと必しとて真苦堪多動もまれらち臥てのそありける小忠二不契されこの
 年の冬の比此の店舗を修理ひ酒と活り油と粥湯に隠田の耕作小社客二名と
 使てそのまを堂とせり餘一個の炊妻と一個の小厮と主僕六口半商半農の
 世の経営小女ありのりあり小忠二の精悍あり後見とせり現古川水酒
 志との世の諺の虚語あり家一旦亡びされも幸ひとて地方と去る栄枯得
 失反覆ももあはれ跡の絶き小大夫次が性の怪くと且校りりやと克敷小
 村と差配と暴戾残刃心の初ひるる死只その積て散まると知るり故の祟
 ろの因て識者の評さう大夫次は當初途小蛇齋ありて撈り五色の玉を獲り
 て是より猛可の發迹と富一御を傾けしもその亡んたる及びて舌命が為謀ら
 きて舌命の即蛞蝓を俗ふるめらと唱るの蝸牛に似て売る角を蛇



景市へ過ぐれば
 極當の新座小阿健左
 界の音絶を多し吉呂

かけ市



小太二

出像第廿七

中ちゆうの粘ねりり時ときの身みと縮ちぢくと動うごかぬを竟つひに死しに至いたる。その時ときの事ことを經つと験けんされど。其そのの
 毒どくの術じゆつありし。その所以ゆゑ。且かつ舌した命いのちの鐵てつ屑くず鍛た治ぢ郎らうの鐵てつ赤せき蛇だの
 怕おそる。此こゝ彼か共ども相あひ対たいの義ぎあり。物ものの尅く遇ぐふ。利りあり。必かならず衰おとろふ亦また奇あやる。
 夫おのれ。因よる。作さす。者ものも。自みづか評ひらま。朱あか之の介けが。大おほ和わ之の望のぞ前まへ五ご郎らう謀まら。れ。て。其そのの妻つま
 與あ多たと。其その通とと。金かねと。喪さうひ。と。大おほ夫おとこ次つぎが。舌した命いのち命いのち吐はされ。其そのの妻つま小こ植うゑと。其その會あひ
 其その金かねと。奪うばれ。と。相あひ似にて。其その趣おもを。下くだり。又また落お葉はが。朱あか之の介けの。金かねと。亦また似にて。京みやこ師しへ
 と。遣つかせ。と。阿あ健けんが。凡たゞ作さす。金かねと。亦また似にて。觀くわん音おん寺じへ。遣つかせ。と。相あひ似にて。用もち心こころ亦また異いて。辟は言げんの
 那な能のう因いんと。賴らい政せいと。白しろ川がはの。関せきの。歌うたの。相あひ似にて。亦また非ひ常じょう類るいの。判はんあり。如ごとく。看み官くわん疑ぎ似にの。眼まなこを
 拭ぬぐふ。と。其その味あじせ。分わ明めいる。其その間ま話わの。事ことを。め。く。其その畢は竟つひ其その黃わう金きんが。船ふね積つみ計けい赴しゆ
 其その後のちの。話わ説せつ其その甚し度どを。其その次つぎの。卷まきの。首くび小こ鮮せん分ぶんる。を。聽きひ。か。
 近ちか世よ説せつ美み少せう年ねん録ろく第だい三さん輯しゅう卷まき之の四よ

村田

